205195−001−8

特42−986

白子屋於駒物語

半　閑子／編

上

M18

EDV−0221

吉野山巻之
[illegible]

白子屋お駒物語叙

戀娘昔八丈と浄瑠璃本ふ有觸た白木屋お駒の實傳實記を虚語へ微塵も斜子縞腹黒桟の古船來もの他ふへ無類飛切れ挿画を加へ極美々しく洗滌な迄一冊へ新林木町の大騒動今へ昔の事あれべ幼婦小兒の教へ届かぬ斯る事寝も起ふーふらん然ち言へ人の風俗を見て我容姿直せが教へ

の一つ轉む処ふ杖つくが先づ大丈夫金の脇差切つた斫つたへ世間ふ多し是咸戀の横路からと編者が例の老婆心幸ふして世ふ持囃子さるれば其悦びへ如何ふやならん

申六月

半閑子　志るす

白子屋於駒物語上卷

半閑子編次

第一回

享保の始日本橋新材木町白子屋一家の騒動を委曲尋出るゝ所も此白子屋へ材木問屋を營み地面も間口十二間奥行へ新道の方へ廿五間沽券千三百両の居付地主住居も至て手廣く此近邊に續く者なき大身代番頭手代丁稚まで家内の總人數四五十人暮し亭主へ庄三郎と云て今歳六十歳妻へお常と呼び四十歳なり元來この庄三郎へ養子にて妻へ家付の娘其上至て我儘ものなれ共常に所天を蔑如み〻萬心の隨ふ振舞けれど庄三郎へお心好故何事もお常の心任せにして爭へ共又娘お駒と云る容貌勝れ其美麗さいとん方なく年已ふ二八ゝ及べ縫針の業行儀作法も知る頃なれど伊達ふる母を見慣ひ成育むも端やて卑き事を好み淨瑠理三味線ゝ心を入芝居の替り目落語の寄と浮氣ふ噂のみふ日を暮したるゝ畢竟父母の教方至らざるゝて取譯母のお常へ心邪ゝして慾深く己が氣儘ふ振舞夫へあれど無ゞ如く何時ゝ帳場廻りの髪結清三郎と密通し内外の眼を窃み忍び合しゝ始の程こそ穩便ふしたれ後ふい大仰にふり物見遊山い勿論いづくへ行ふも連れ歩行派貴を厭へ遣ひ散し世間の取沙汰親類の風諫も馬の耳に念佛更に聞入たる容子ふく娘お駒ふも衣類櫛笄も時の流行を旨とし金錢を厭へ贅澤づくめふ飾らせて此屋の花見彼屋の納涼と四季の遊場へ固より或時ゝ俳優幕間を集め酒宴を開きて樂むあど上ふさ奢侈ふ日を消しけれ心ある人い皆爪弾して忌嫌ひ親類までも疎ど誰云ふと云ふ一つ印籠のお常と綽号し交際ふ者も真りける現に娘の危い父親より母の教育ゝ大事ふるに斯る養育やうふれ母を見真似るお駒も亦此家の番頭忠八と人知らぬ言替し主親の目を忍ひ交情しゝ早くもお常い覺りけれど己も密夫の有事故小言もいへゝ結句取持て逢せる程ふれ是より家内の取締も一層届かゝ奉公人へ勝手次第ふ真似をして正しく動る者ふく番頭手代の引負い勿論下女下男迄ゝ手當り任せふ持出せど咎る者もふく〻お常へ又例も庄三郎少しの小遣を宛行ひ追ひ出し遣つた後へ娘お駒ふ番頭忠八髪結の清三郎を招き下女のお久お菊抔日頃己れゝ手馴けたる者を相手ふし落語家俳優淨瑠理語を集め酒宴を

開き打興ぜるを此上なき樂とする有樣あれば此家へ出入ものい語りぐさとい〻者あく就中杉森新道孫右衛門店へ住居せ一横山玄柳といる針医い朝より白子屋へ入浸りお常ハ同よう忠八をも主人の如く持ふ一并ら機嫌の善悪ふて己が心も痛める程あり斯る紊乱お休ゆさしもの身代も漸々ふ衰へけれど亭主いこれを些許も知らぐ享保八年十月の頃構ふ例年の如く店卸を為て見たるふ貳百両の金ふ差支へ必至の場合ふありけるに流石の亭主も驚きたれどお常と忠八とが申合程能言做一たるふ籠絡て自分い金子調達ふ奔走たることを是非ふもれ

第二回

恁て庄三郎い諸親類を始心易き

方を頼こ歩行たれどふ常の所行を憎み居るもの而已多けれい誰あつて用達呉る者もふく詮方尽て日頃怨意ふ一たる同ト材木屋仲間の加賀屋長兵衛方へ到り緯の概略を語り何卒調達一て給もれと頼みたるう長兵衛い庄三郎の人此善を憫ミ何れ工夫を為て見申さんと其日い返一おき夫より仲間内の誰彼方へ赴き白子屋の容子を物語り無尽を取立呉よと頼み一ふ一同も早速納得一一人前の掛金貳拾両と定め總数十本と一れるが立所ふ数の如く纏りたれば庄三郎を招き金子を渡せ一に庄三郎い一同の好意を謝一集り一人々へ相應の款待をふ一尚跡々の事抔懇ふ頼ミ別一て長兵衛へい厚く禮を述べ貳百金を懐ふ一其夜い立帰り委細の始末を妻のお

常番頭の忠八が物語り金子い夷棚へ上げ燈明を点け是も偏に加賀屋長兵衛殿の厚き情に依るものなれば今から鳥渡彼方の宅まで礼に往んと仕度匆々出行が暫くして戻り来り其夜は安心して眠りける所も此加賀屋長兵衛といへる矢張新材木町に住居材木問屋を業とせ加賀屋弥兵衛方に十歳の時より奉公十年の年期を首尾能勤め上げ尚十五年の札奉公まで立派に勤め主人から加賀屋の暖簾を貰ひ同町へ材木店を出したる男なるが斯く堪忍よき人にて殊に道理り宜くして侠氣ある故人の用ひも好く漸次に繁昌し花王も年毎に殖え今い公邊の御用達にも申付られ富と榮えなるが同商賣の白子屋より無心をいまれ段々内實の事をも聞て見るに如何にも聞に忍びば

思ひ仲間を頼み仕法を立て遣りたれば先づ安心と思ひたるに翌朝未明ぬうち門を叩く者あれば店の若い者驚き誰何と問へば白子屋との答へり戸を明け内へ入れれば庄三郎い慌忙しく旦那い家に御坐ること狼狽た容子長兵衛い奥に聞付何事やらんと立出先づ庄三郎を坐敷へ伴ひ如何した譯と尋ぬるに然へば昨夜御配意下されたる金子を神棚へ上げ置たるところ今朝に至り妻が改め見るに紛失して見え申さばこの事外へ漏れ盗賊の這入た容子も見えず合點の往ぬ事なれば是より其節へ出で詮議をして貰ふ積りに就てへ一應御相談に上りたと急込だる体を有繋に長兵衛先々と制し偖云やう成程是は外より入たる盗兒にあるまじ併し今之を訴へれば仲間の衆ま

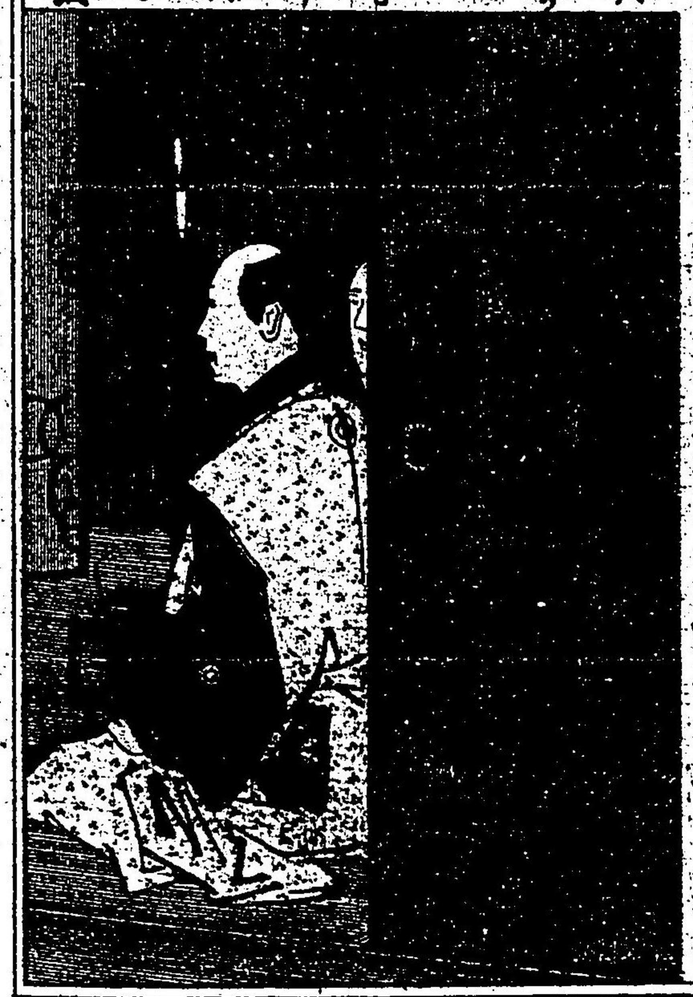
で引合ふ出る事貳拾両づゝ出させた上番所まで引出さゝへ氣の毒ふ譯ゆゑ内々まて詮索するゲ
軍からんとハゝふものゝ明日の勘定ふも困られやうから我併ゞ貳百両用立申さん夫ふて此節
季を済せ都合宜折ふ返金されよと金子を揃へ遣與したるふぞ庄三郎へ押戴き重々の御深切
仇疎ふハ思ひませぬと涙を流し歡び証書を認め勇々として立帰りけるお常と忠八を申合せもの
夜の内ふ甘々と密み盗みふを両人狂
合ゞと微笑合是を斯して那様
と奢る手段ふ談合ひるハ浅間敷
こゝでも為り鬼角して其年も暮れ
明れば享保九年の春こゝふりが先何
事もふり三月の末に至り江戸
市中の大火ふて白子屋が出入の諸侯方
を始め屋敷向殿多類焼彼屋より

這屋より普請を云付られ故目の
廻る程忙がしゝが其利益も多く貳
千両餘の儲こゝれり

第三回

斯く近儲ふ有れど湯水の如く遣ひ
れば恩地又復難義こゝふり彼加賀
屋から借り受恩金も庄三郎の前
ハ返金たる様云微おけど未一文も
返さゞ加賀屋もまた催促せゞ打過けるが彼是するうち早其年も暮れ翌年こゝふり番頭忠
ハ庄三郎に對ひ迚も此容子でハ立行ず何こゝ献通して下さるやうと云出せしふ不審を懷き如
何ふ尋ねれば御屋敷向の普請も積り違ひて儲かる見込が貳千両餘の積こゝふり山方
も一時ふ直を上げ其分ハ大抵借りふ成て斯の通りこゝふり故定こゝ帳面を拵出て口から出仕ふ偽

をお常が側から相槌を打種々と口車の楫を取る故庄三郎が誠と思ひ吐息を突き須臾腕組をして居たるが思按ふ餘るより又々加賀屋に諸り委細の容子を物語り宜き御工夫もあらばと熟きければ加賀屋長兵衛が例の快氣ふて打捨置れぬ氣の毒ふ思ひ時節とは申ながら仲間の内で也も第一旦へ御家の斯も不如意ふあり給ふは是非もなき事夫ゆ就ては寧そ嫁御のお駒さん持参の位る壻養子をふされてハ如何ら實へ去る方より一人頼まれて居れば御身が思召次第で先方をも突留者も御縁が有らば其金を以て山方の借財を済したら荷出しの幣りもなるまと く暮し向も注意をふさば自から身代の立直る譯ふあり度せうと深切ふ詞ふ庄三郎が深く喜び今ふ始めぬ



御心入女房とも相談致して早速御返辞を致さんと暇を告げ立帰りける此事をお常ふ語るにお常篤勘辨して其夜庄三郎が講釋場へ出掛た跡へ清三郎と忠八を呼び相談しける ふ貴つた上で離縁の仕方ハ幾等もあれば先差當り持参金を取るが肝要と忠八が発言ふ其れと極りお常ハ庄三郎へ其議無の旨咎れば躰て加賀屋へ赴き何卒ら昨日御話の人物を世話下されたと依頼れ然ハ先方へ出て見ませうと夫より長兵衛ハ大傳馬町の家主平右衛門方へ到り養子の一談を物語りけるそも此平右衛門が長兵衛へ嘯せて養子とハ同町の地主弥太郎方ハ久しく勤めたる又七とて至極手堅き辛抱人故弥太郎の氣に入り已ふ年期も明たる事ふれば弥太郎が親分とより五百両

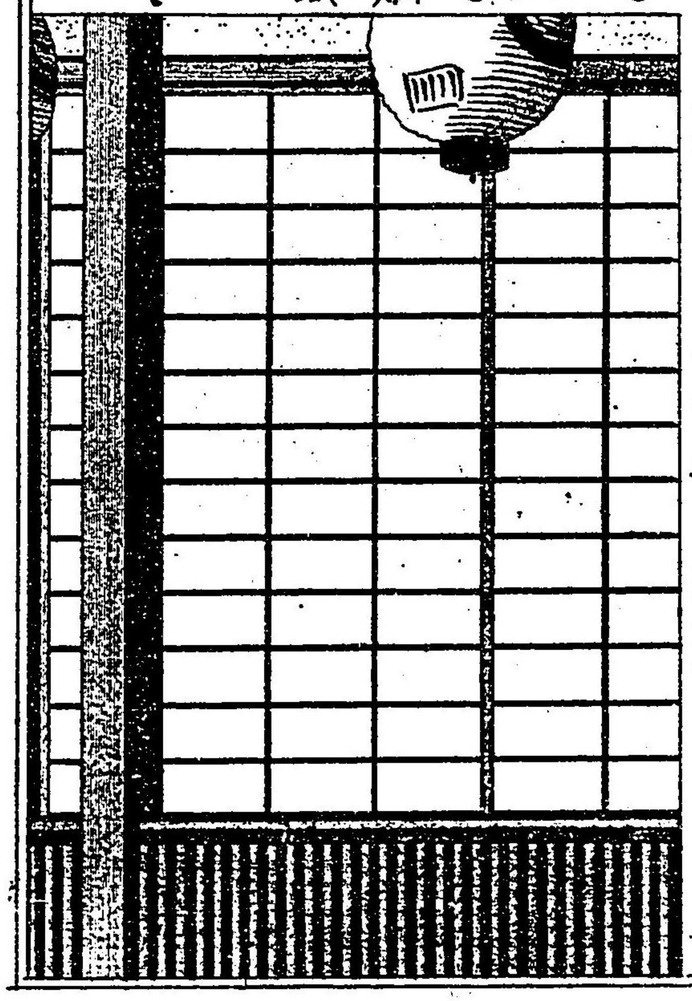
の持参金を持せ何方へ相應ふ所へ壻養子ふ遣らんと豫て弥大郎から平右衛門へ頼み平右衛門
は又手廣ふ加賀長故彼の仲間うち探に貴ふ人もがらんと出した所から茲ふ及びたる事ふりとゞ備
養子の一談も縁有て雙方異議ふかりしが吉日良辰を選み目出度壻入をふせしが此一件お駒が
不承知とへひたるを種々ふ説奬め後は兎も角も五百両の金で楽むべし夫がお前が不承知を云てゝ
ては困却ふから何れ容子を知たら先方
から離縁をとるだらゝ左も無へ所
が幾等も仕方が有うからとお常と忠
八が辨口で奬め嫌々領承せたる事ゆへ
お駒は祝言の夜より癪氣で難義さい
ひ立母の側へ寝忠八と枕を並べお常は又
清三郎を引摺り込で共ふ楽を尽し
たるは人面獣心言語同断ふる行ひな

り斯る事とは一点知らぬ又七は不審を
抱き作養子の事ふれが万事扣えて
何事も口へ出さゞ過ける中早くも一年
餘りとふれり

第四回

却説も又七は一年餘も過たる故家内の
容子も大略知れ眼ふ餘る事のみ多くう
くれば猶り心を苦めたれど誰迎相談も
る者ふく第一母と女房が養子歓待をせぬ程ふれば家内中優しき詞を懸る者もふゝ又七の事を
いゝ突掛物ふをる中ふ下男の長助とつふい信州生れの田舎漢たけ万事律義ふて主人と思へが又七を
大事ふして若旦那と呼び心を尽してよく事へお常お駒忠八清三郎が挙動を憎み陰ふり日向ふ
ふつて又七を保護ける故又七も目をかけて名使ひたるが或日給金三両を前借し在所へ送らんと

手紙(封込て瀬戸物町の島屋(持行たる途中で畫鳥ゐ奪れ青く成て立帰り忽然ゝ(て用事も手ゐ附ず折々長助ぢんお前何様(たの〻へと下女杯ゐいれて氣ゐ付程ゐれば何ゝ容子の有事と又七ハ長助を我部屋(招き仔細ゐらんと問ふゐ有(事を物語り涙を流(けるを見て不憫と思ひ用簞笥の小抽斗から金子三両取出(之を遣るから早々田舎(送り両親ゐ安心させよとゝひんる長助ハ夢ゐと計り打悦び數度ゐし戴き此御恩ハ決(て忘れませぬと是より一層注意四人の者の容子ゐ目を注めけるを知らぬお常ハ或日お駒を始め三人を部屋(呼集(何〻密々耳語居たるゐ常ゐ声ゐて毒茱といひたるゐ漏れたる故庭の隅ゐ草を取りて居たる長助へ抜足ゐて窓の下(寄り



聞居たるをトハ知らぬ(て お常ゐい ふやう急ゐ殺(て い露顕のもと一ト月計も過て死ぬやう ゐ茱を調合(て貰ふゐ宜(からん此事ハ新道の玄柳ゐ相談をゞ(と相談ゐ(四人連立て出行にゞ長助ハ発と一息(て塁所へ立戻り素知らぬ顔(て居たりる偖四人の者ハ玄柳方へ赴き毒茱の調合を密々ゐ頼みゐるゐ玄柳ハ心の内ゐ思ふやう我ハ針医ゐれば毒茱を買ふこと叶ハゞ且後日露れたる時ハ逃るゝに術ゐ(去り乍今謝絶をゝふとさハ事面倒と鬼さま斯さま思ひ惑ひ(が急度思按を廻ら(承知の旨答へ四人の者を返(おき葛根湯を二貼求め之を炮烙ゐて強く煎り細末ゝ(て得も知ぬ茱とゐ(金紙を以て最郭重ゐ包み密とお常ゐ渡(けれゞお常ハ真の毒茱

あり と心得痛く喜び厚く報酬たるにぞ玄柳い四拾文計の元手ゑて拾両餘りの謝礼を受け獨り心ゑ悦びけりお常い又此葉をお駒ゑ渡し下女のお菊ゑも云付又七ゑ食事の度毎ゑ聊づゝ食物の中へ加へさせたるを又七い此頃彼長助より聞得たれば随分用心し長助も亦心づけたれど大勢ゑて をる仕事あれば三度ゑ一度い知らぬして食したる事もあく一月餘り立ど何の変りたる事もなければ四人いもどかしく思ひ或日お駒い手自鮒の切身を甘煎にし又七の部へ屋へ持行き這い毋様ゑお前ゑ上んと態々新場から取寄給ひし魚あれば お食りあされと一年餘り物さへ碌にいそぬお駒ゑ携へ来る事故又七い喜び直ゑ飯を食んと己ゑ箸を取らゑと

をる時長助来りて目配せしゝゑ扨ゑと思ひ事ゑ紛らし食事をせる程あく新道の湯へ出掛たるを見て長助も後より同じく入湯ゑ赴き今日毒葉をお駒ゑ自から煎たる魚へ入たること又ゑ常より一服長助へも與へたること抔物語りける

第五回

偖て又七い委細の事を長助より聞き一度い駭き一度い怒り吾輩い是から加賀屋へ往て相談をる事ゑ有から其方も後から来て呉ろと湯屋を立出其足ゑて加賀屋へ到りし丁度長兵衛も在宿と聞て直ぐゑ奥へ通り不沙汰の詫抔述て偖白子屋の一伍一什を物語り最早勘辨成かねれば表立る積りと立腹したゑ長兵衛も以の外驚き須臾思案して居たるゑ程ゑく

長助も来り尚又漏れたる話しをし己れがお常より與へられなる毒茱を出し三人額を合せて相談中長兵衛い心付き彼の毒茱を飼猫ゑ食はせて試し見たれど何の変りもなければ是ゑい子細のあることあらん我又仕方もあれば先々穏便にし随分油断ゑき様せられよと辞を尽くして宥め一先帰しけるが両三日過ざて庄三郎夫婦を招き内實の容子をゑ聞き左までゑ不如意ゑるい何とも氣の毒及ばずながら御助成もいとさんが夫ゑ就いても改革をすることとし御両人ハ隠居して若夫婦ゑ身代を渡し番頭の忠八ゑハ暇をやり小手前ゑ暮されたら忽地ゑ舊の姿に立戻るべしと常ゑ障りのゑきやう遠廻しからお常ゑ夫とゑく意見をなしけるに庄三郎ハ深く悦び一も二もゑく領承したれどお常は更ゑ合点せず又七が擧動を見るに出入屋敷の多ゑい我家の商賣抔ハ匆々仕遂げる器量ゑゑし夫ゑ引き替へ忠八ハ數年勤め万事心得居るのみか発明者にて花主先の受も至極宜く今彼者ゑ暇をやれば猶々都合悪しゑかるに又七へ家を譲り忠八へ暇をやれとの御差圖を憚りながら餘り御勝手過るゑどいふにて長兵衛ハ尚もお常を諭しけれど一々云ひならそひ結局の詞ゑ氣ゑ入らぬ養子あれば地面を賣ても持参金ハ返し離縁をいたすと罵り失庄三郎を引立て聳を蹴立て長兵衛方を去り家へ戻るや否庄三郎ゑハ例の通り錢を持たせ講釋場へ追ひ出し遣り忠八ゑ駒清三郎の三人を招き酒宴を開き今日加賀屋でいまれし事又對し事を物語り此上ハ五百両の金を才覚し又七を離縁をるが肝腎あり這の金ハ忠八お前が何の手にしても算段しふといひつけられ忠八ハ打悦び急度調達しませうと受け合たが外ゑ手段のゑき所より遂ひゑ通油町の伊勢屋三郎兵衛方へ或夜窃りゑ忍び入り用箪笥ゑ仕舞ひ取りし五百両を奪ひ其後何食も面色してお常へ逓與したるハ大膽不敵の振舞あり

實錄文庫　白子屋於駒物語　上巻終

NO.1
明治十七年十月廿一日御届
同 十八年三月 出版

編輯兼出版人 岐阜県平民 春陽堂 和田篤太郎
東京府下南傳馬町一丁目十四番地

實錄文庫
白子屋お熊大岡政談 全二冊 定價金十錢
同 南總里見八犬傳 全二冊 定價十錢
同 貫長喜八大岡政談 全二冊 定價五十錢
同 赤垣源藏德利の傳 全二冊 定價金十錢
同 佐野鹿藏英勇傳 全二冊 定價十錢
同 荒川武勇傳 全二冊 定價十錢
同 宮本無三四二刀傳 全二冊 定價十錢
化 茨露の面影 全四冊 一冊五十錢
お 酒の錦總の妻扨 全三冊 一冊三十九錢
三つ巴總酒白雪 全三冊 定價三十九錢
園、花匂姫垣 全二冊 定價十六錢
八重櫻里酒夕霧 全二冊 定價二十六錢
八重總路酒葛籠 全二冊 定價二十六錢
小さす 全一冊 定價金四十錢
金五娘節用 全一冊 定價金四十錢
娘節川續編 若美登里 全一冊 定價金四十錢
おくま 江戸紫 全一冊 定價金
惣二郎說合鏡心乃妍醜 全一冊 定價一三十錢
艶近世月雪花戀路の踏分 全三冊 價六十錢
命綱海南第一勇士汗血千里駒 全三冊 定價五十九錢
異國和莊助衛 全一冊 定價十錢

實錄文庫 白子屋お熊大岡政談
定價金十錢

৪৪ ঘণ্টা